





# 4



行き場のない人たちが  
“自分らしく” いられる  
「きぼうのいえ」。天気  
のよい日、玄関でくつ  
ろぐ入居者とスタッフ

## 甘利 てる代

Amari Teruyo

ノンフィクションライター。取材で訪れた大型高齢者施設や在宅老所は約180カ所。ホームヘルパー・介護相談員・東京都福祉サービス第三者評価者・介護サービス情報の公表調査員でもある。著書に「高齢者ケアの達人たち」(CLC)、「私も入りたい「老人ホーム」」(NHK出版)、「介護施設で看取るということ」(三一書房)など

ひたすら寄り添う。どんなに罵詈雑言を吐かれようが受容するのだ。やがて痛みがとれ、スタッフが自分を受け入れてくれることがわかるとどうなるか。「ここだったらもっと生きたい。生きてもっと楽しみたい」と言い出すのだ。

ホームレスだった入居者が最期の瞬間まで誰かを恨んで死ぬのは悲しすぎる。ラストステージは「自分の人生、まんざらではなかった」と思える楽しい日々を送ってほしい。これが、美恵さんが託した願いだ。そう、きぼうのいえは死を待つための施設ではない。山谷という町で生きてきた人が、本人が望むように住みなれたこの地で「自分らしく」「大切に」にされて生ききるための家なのだ。

### ドヤでの孤独死を防ぐ

きぼうのいえの在宅医療を支える事業所の1つが、NPO法人訪問看護ステーション「コスモス」だ。きぼうのいえで入居者の看取りが始まるときには、コスモスの看護師が3~4人でチームを組み連携してかかわる。コスモスは訪問看護のほかには居宅介護支援・通所介護・健康相談事業を併設し、この地に根ざしたさまざまな活動を展開している。

2000年に「山谷の人たちにも周辺の人たちにも分け隔てなく訪問看護を実施したい。医療が行き届かない地域にこそ必要だ」とコスモスを立ち上げたのは、山下真実子さん(NPO法人代表)を含む看護師3人だ。10年目を迎える現在、看護師は20人を抱えるまでとなった。

「事業を始めたころには、まだドヤの中に入っていく訪問看護師はいませんでしたね」と山下さん。山下さんたちは、ドヤの一軒一軒を訪問し、中に入るとさらに一室一室のドアをたたいた。時には、骨折や病気の後遺症のために簡易宿

泊所のベッドで排泄物にまみれて生き永らえている人を見出すことも珍しくはなかった。ドヤの住民たちに高齢化の波がおしよせていたのだ。ケースに応じて福祉につなげ、生活保護や介護保険の申請へと進展していく。アルコール依存症・高血圧・糖尿病と、山谷の住人の多くは高齢化も相まって健康とは言いがたいものだという。加えて、身寄りがなく独り身で、誰かに支えてもらうことが不得手だ。

阿部直美さんは、OLから看護師に転身し、その後、自ら選んでこの地にやってきた。「ここでの訪問看護では忘れられない人がいる」と話してくれた。その人はHさん。「がんの末期で、三畳一間のドヤ生活を送るHさんは何度訪問しても心を許してはくれませんでした」と阿部さん。それでもHさんに心を尽くした。その後、病状が悪化したため、きぼうのいえに入居。いよいよ最期のときが近づいていた。「一緒にその時を待つ」。それが最後に阿部さんに残された唯一の看護だったと振り返る。一晩中手をつなぎ、全身全霊で寄り添うだけだ。Hさんは安心して目を閉じ、そのまま目覚めることなく阿部さんの腕の中で息を引き取った。「訪問看護でかかわるドヤの人たちに、1人ひとりが大切な存在なんだということを伝えたい」と阿部さん。

コスモスは、低額宿泊施設「コスモスハウスおはな」を今年5月中旬に設立した。阿部さんが施設長だ。「おはな」は病気になって簡易宿泊所での生活が困難になったときに入居可能な、きぼうのいえと同じ第二種社会福祉事業施設である。何としても山谷の人たちがドヤの一室で孤独に死んでいくのを防ぎたい——そんな思いを形にしたのだ。

「きぼうのいえ」「コスモス」の実践は、山谷の人々を最期まで人として尊重したいという祈りに通じている。人が人を支えることの根源がここにある。